

く、其勢力は常に薩長の二藩により代表せられ、幾多の波瀾を生じたり。即ち志士等が歩を進めて討幕に移るや、薩藩を中心とせる雄藩は、志士が既に遺棄したる幕府改造・公武合體の策を講じて、時世を匡救せんとす。境遇の異なる所以なり。

要するに坂下事變は、志士の行動が幕府改造・公武合體の微溫的手段より、王政復古・幕府討伐の急激手段に推移する過渡期に於ける一現象にして、蓋し志士によりて計畫せられし最後の幕府改造運動たり。されば爾來尊攘派に屬する志士の間には、また一人の幕府改造・公武合體を説くものなく、皆いづれも其勢力を集中して討幕の事に執掌せり。今此事變を以て、尋で起れる寺田屋事變と併せ考へんに、志士の行動が常に大勢推移の先驅を爲せるを見るべし。此意義に於て安藤信正要撃の計畫は、縦ひ完全に其目的を達する能はざりしとするも、世態に影響せる所必ずしも少小なり

とす可からず。況や幕府の威信がこれが爲にいたく傷けられしはいはずもあれ、信正の如きも自ら其地位に安ずる能はず、本多忠民と共に前後老中を罷めて、久世安藤聯立内閣の一角先づ崩れ、一縷の望を屬したる長州の公武間周旋も遂にまた振はず。天下の形勢將に急轉せんとするの端緒を開けるに於てをや。坂下事變は、其行爲に於てはもとより議すべきものなきにあらずとせんも、其心情を諒し、其結果を按ずるに、世運の進歩を助長せる事誠に大なりといふべし。

「スモール」文化の研究

文學士 阿部 秀助

彼の「プリニウス」として、東方第一の肥沃なる農地(fertissimus ager totius orientis) (註一)と稱せしめし「バビロニア」の野は古代史上の一大寶庫

たり、而して此寶庫の鍵を求むるに熱中せし英、佛、米、獨の過去三十年間に於ける發掘的努力は畧ぼ吾人をして此平野に發生せし文化の基礎が「スマール」民族に負ふ所以を明かにするに至れり。(註二)

註一・F. Delitzsch, Im Lande des einstigen Paradieses.

s. 6.

註二、「バビロニア」の面積は約十萬方籽にして之れを現時の歐洲諸國に比する時は畧ぼ上部伊太利の面積と相同じ、隨つて「アロイヌス、ブレンゲル」が屬島を除きたる伊太利王國の面積と相等じとなせしは正鵠を得ざるものにして、此點を明かにせしは「ヘルマン、ツクナー」の功に歸せざるを得ず(F. Delitzsch, Handel und Wandel in Altbabylonien P. 44. u. H. Wagner, Die Uebersetzung der Anbauflechte Babyloniens und ihr Ursprung, Methodische Beidenken.)

而して「バビロニア」方面の研究材料中殊に主要なるもの左の如し。

C. P. Tiele, Babylonisch-assyrischen Geschichte. 2rde.

F. Hommel, Geschichte Babyloniens und Assyriens (Conken's allgemeiner Geschichte)

F. Thureau-Dangin, Die Inschriften von Sumar und Akkad.

F. H. Weisbach, Zur Lösung der sumerischen Frage.

E. Meyer, Samierer und Semiten in Babylonien (Abhandlungen der Berliner Akademie 1906)

H. Schneider, Kultur und Denken der Babylonier & Inden.

L. W. King, A History of Sumar in Akkad.

E. meyer, Geschichte des Altertums. (1913)

尙ほ論者は本論文を構成するに當りて、主として最近に接せし「ロエバー」氏(伯林)の研究を參考し、傍ら「ライナー」「ユナイダー」「マリンチ」「ハーバー」「ホル」諸氏を参照せり。

二

楔形文字の發明者を稱せらるゝ「スマール」民族(Sumer, Schumer, Schummir)の歴史上に實在せしは、西曆紀元前約三千年前後にして、最近「シユナイダー」氏の説によれば、此民族は「バビロニア」

「ア」地方に於ける原始民族にあらずして、寧ろ同地方に於ける初期の移住民たり、而して彼等が何れの方面より移住し來りしやに就きては、同氏は海上又た沙漠方面よりの移入説を排して、山地説を主張せり、即ち同氏の之れに對する立證としては(一)同民族が國土と山岳とを同一の文字、同一の意義に於て使用せしこと、(二)同國の主神「エールル」(Eilur)を祭るに、昔時の状態を存する爲めに、平野に丘陵を築き、其神殿を名くるに「エ、クル」(Ekrum)即ち「山上の家」なる名稱を以てせること、(三)當時の首都「ニブール」は、中部「バビロニア」にありて、其位置恰も「イラン」高原の通路に存すること、等を以てせり、(註一)次に「ヒュバ」氏は骨格、言語兩方面より此民族を研究せり即ち前者に就きては頭部の特徴より「モンゴル」種に屬するものとなし、殊に此時代の彫刻に現はれたる人物は鬚なく、眉濃厚にして、頬骨突出せり

となし、更に後者即ち言語の方面より考察して、之れが文法上の組織及發音の状態は「セミチツク」族の言語とは根本的に異り寧ろ之れが特徴上、「モルゴル」系統殊に「トルコ」語に接近せることを論せり、(註二)更に言語上の比較研究により以上の説に數十歩を進みしものは牛津大學の「アツシリヤ」學者「ボール」氏にして、同氏は支那との間に著しき類似點の存することを一々單語によりて立證せり、此點に就きては曾て學友濱田君の紹介せられしものありしを以て茲に畧す、(註三)尙ほ最近、「ドクトル、リース」氏によりて根本的に訂正せられし「ウエバー」一般世界史(第三版)第一卷によれば「アツシリア」學の進歩上に齎らされたる偉大なる出來事は之れが文化の基礎及彼の楔形文字なるものが「スマール」民族によりて與へられしことなりとす、而して此の民族の言語と骨格とは「メソポリタミア」及附近の地方に居住せし民族とは

甚しく異なれり、吾人は「スマール」民族によりて所謂舊世界の原始民族中最も進歩の階段に到達せるものを見る、と共に、其の八種の系統に於ては「モンゴル」系統に一致す(註四)とあり、但、此民族の傳統を嚴密に批判するには、今日迄の「スマール」民族に關する言語的智識のみにては未だ不充分なるの觀あるを免れず。

註一・H. Schneider, Kultur und Denken der Babylonier und Juden. s. 23

註二・Dr. E. Hübner, Kultur und Wirtschaftsleben im ältesten Babylonien, (Preussische Jahrbücher, B. 150, s. 414.)

註三・C. J. Bull, Chinese and Sumerian, P. 55-151 and A Sign-list in which old forms (Ku Wen) of Chinese.

Characters are Compared with Sumerian Congeners or Prototypes.

註四・G. Weber's Allgemeine Weltgeschichte, 3 Auflage B. I. s. 32.

四

「スマール」民族の政治組織は之れに關する史料の斷片的なる結果、確實に知ること能はずと雖、然かも大小幾多の都市的國家に分裂せしことは明白なる事實にして、是等の都市中、殊に政治上、主要なる地位を有せしものは「ニブール」(Nippur)「エレヒ」(Erech)、「ウル」(U)等にして、(註一)殊に「ウル」の如きは前後二回、政治上の覇權を握るに至れり、而して是等都市的國家の元首は「王」にして王は常に天祐によりて、之れが位に即きしのみにあらずして、寧ろ神の化身として信せられ吏しものなりとす、更に副王の地位にあるものを「パテシ」(Patesi)と稱し、尙ほ其外、大小の官僧侶、裁判官等あり、而して彼等に支給せられしものは當時、王の穀倉に藏せられし穀物其他の生活品を以てせられしものなりとす、以上、特權階級に對して一般の國民は自由民、半自由民及奴隸の三階級に分たれ、彼等の中には地主あり、小作

人あり、手工業者あり、單純なる勞働者あり、而して彼等の社會上に於ける義務としては租税（政法兩方面に對し）兵役、及運河又は通路の大事に關する賦役等なりとす、但最後の賦役は勞力を提供する場合と、之れに相當する金額を支拂ふ場合とあり、又、婦人にして土地を有し、或は獨立して業務を營むものは、男子の場合と同じく以上の義務を負ふものなりとす。

次に此民族に於て、之れが經濟生活の中心をなせしものは農業にして、國內の土地は王室の所有地と個人の私有地以外に、寺領其者が如何に主要なる意義を有せしかは、當時に於ける土地讓渡狀の明かに吾人に證明する處なりとす、而して是等の土地たるや、自己經營を以てするものなりと雖、其多くは、小作制度の下に、他人に貸與せしものにして、此の場合各人に割當られし面積は二「ヘクター」より五十「ヘクター」の間にして小作料

は、契約の際、相互の間に一定の地代を約するものと、年々の收獲高によりて之れを規定するものとあり、即ち後者の場合にありては、多く、年收獲の約四分の一に相當せしものなりとす、又た、以上の仕拂に供せしものは、其收獲物を以てするものと、現金を以てせしものとあり、次に當時栽培せられし農産物にして、今日、明白なるものは小麥、大麥、胡麻・黍、豆類等にして、彼の小麦麵包の如きは其起源を此地に發せり、（註二）尙ほ當時専ら農家の副業となりしものは酒造業にして十七種の酒類あり、次に林業は發達せず、僅かに「チグリス」「エウフラテス」の河畔に一種の蘆荻を見しのみにして、總て船材及農具用の木材は他方面より輸入せしものなりとす、次に牧畜業は農業に見るが如き、大なる發達を有せざるも、尙ほ、驢馬、山羊、羊等あり、殊に馬は「ウンクナート」氏の研究によれば既に、三千年前にあり、

(註三) 次ぎに漁業は同國にござりて最も重んぜられしものにして、殊に「エウフラテス」の河中に産せし魚類の中に甚しく大なる鯉の存せしことは「デリツチ」氏の古代「バビロニア」商業研究中にある繪畫の吾人に示す處なり、(註四)、而して此方面にありては當時既に一種の漁業粗合ありて、海洋、湖水、河流方面より捕獲せられし水産物を各市場に齎らせしものなりとす、更に當時に於ける工業及商業の一般に就きて考察するに、先工業にありては手工業の如き職業上の分化甚しきものありしと共に、其間、織物業の如き大工業の部に入る可きもの少からず、而して是等の工場にありては四十人より五百人に至る間の労働者を使役せり、尙ほ當時の労働者は一般の使用人、熟練職工、不熟練職工及日傭の三大別に分たれ、彼等の間には各自大小の組合組織せられ、之れが取締役は主として各自の労働條件及勞銀仕拂等に關して其力を盡

せしものなりとす、殊に吾人にござりて興味ある問題は是等労働者に仕拂れし勞銀と大小の官吏に支給せられし食祿との比較となす、即ち今日迄の研究の結果によれば最高の官吏に給せられし額と熟練職工にして最も其技術の見る可きものに仕拂れし勞銀と相同しく、以下官吏の中位は労働者の中位に匹敵し官吏の下級のものは労働者の劣等なるものと相等しく、又、是等の勞銀は官吏の場合と同じく多く、現物支拂にして女工は普通男工の半分、未成年労働者の最高勞銀は一般使用人の最低勞銀に相當し、未成年労働者にして其兩親を失しものは之れが勞銀の一部を支給せらるること、なれり、次に當時の商業に就きて見るに、先づ對外取引にありては殊に東方との取引盛大にして、主として農産物及工産物を輸出すると共に國內に欠乏せし石材、礦物、木材、象牙、羊毛等の原料品を輸入せり、而して此場合にありて最も大なる

便益を與へしものは國內を縱横に開通せし運河にして、之れが大なるもの、附近には倉庫 (Silos) 存し、以て運輸上の手を省くことゝなれり、此點

に於て「バビロニア」は確かに古代の和蘭と稱するを得可し、又、當時にありては鑄造貨幣はなきも金、銀、銅等の金屬は地金又は環狀の狀態を以て使用せられしと共に、金銀の比價確定し、尙ほ以上貨幣の代用物として手形の如き既に利用せられ、工業上に於ける投資額の如き一人にて金六十「タレント」即ち邦貨十萬圓に達せしものあり、而して企業上の利益は投資額の二倍、三倍、甚しきは十倍に及びしものあり、又、利子が一ヶ月二割乃至二割五分の高率を示せしことは、當時に於ける資金需要の熾んなりしと、之れが危険性の大なりしことを示すものなりとす、次に本位貨なるものは主として國家其者によりて規定せられしものと、寺社によりしものと、商人間に於けるものと

あり、其他、度量衡の如き統一的狀態に存せしことは當時の經濟生活をして著しく敏活ならしめしものなりとす。

最後に當時の家族制度と宗教とに就きて一言せんに、前者にありて家長の地位にあるものは男子にして、一夫多妻の風行はれ、其中一人の正妻あり、又、結婚後の婦人は法律上の資格を有せざるも、夫の後見の下に營利事業に従事し得ることゝなれり、又、當時の宗教は頗る「シャマン」教に類似せり、而して各家族、各人が保護神を有するが如く當時に於ける各都市は寺社内に主神を祭り、若、一朝有事の際、此主神の像にして敵國の掠奪する處となるに於ては、都市其者は何等政治的生命を有せざるものと見做されたり、故に當時にありて各國家が戰を挑むに當りて互に各自の都市の神像を齋らさんことに努めしものなりとす、又、當時の僧侶は一面に於て裁判と教育とを司ごりし

ものにして寺社恰も一種の學堂たるの觀を呈し、之れに學ぶものは多く僧侶の子弟にして其課目には習字、宗教、天文學、數學、醫學等なり、所謂、宗教と科學の合一的教育を施せしこと尙ほ現時埃及「カイロ」にありて回教徒の高等教育を司ぐる「エル、アツアル」(El Azhar)の如きものなり、又、當時に於ける尼は時に賣笑婦の如き賤業に従事せしものなりとす。

註一) British Museum, A Guide to the Babylonian and Assyrian Antiquities, second edition P. 2.

註二) G. Weber, Allgemeine Weltgeschichte, Dritte Auflage, I Band, s. 31.

註三) F. Delitzsch, Handel und Wandel in Altbabylonien s. 46.

註四) F. Delitzsch, s. 8.

南朝の隠れたる勤王家 (上)

——伊勢度會民——

大西源一

一 緒言

南勢地方が吉野朝廷の東藩として其の存在に最も重大の關係ありしことは、世に知れ渡れる事實なるが、彼の北畠氏が來て之に據るの前に當り、此地方の一角山田の地にあつて勤王の首唱者たりし度會一族の事蹟に至つては、世未だ之を論せるの人あるを聞かず。之れ度會氏の勤王が主として精神的方面に關し、此の時代に於ける神官勤王家として有名なる九州の阿蘇氏、北陸の氣比氏の如き壯烈の事蹟を留めざるに由れりと雖、其の精神的活動は我が思想史上に最も注意すべき一大記録を遺せり。即ち彼の度會神道なるものは、此の時